



## I はじめに

### —協力者より基調—

今から25年ほど前、大卒で初めて教壇に立った養護学校(今でいう支援学校)で出会った子どもの姿から、協力者自身が気づいたこと、その当時の協力者自身の立ち位置はどこにあったのかという話から始めた。

学校前のバス停で乗り降りせず、ひとつ先、ふたつ先のバス停で乗り降りする養護学校の子どもの姿や寒い冬の時期、校章ワッパンのついたブレザーを脱いでシャツ1枚で登下校する子どもの姿。また、彼女ができた喜びながら、自分が養護学校に通っていると言えず、自分のことを隠し、彼女に嘘をつく子どもの姿。

協力者はその時、その問題は、その子の問題だと思っていた。「差別の問題」はいったい誰の問題なのか。自分の内にある差別性と向き合うことから自身が変わった。全人教大会の冊子の討議課題をもとに、「この社会に根強く存在する差別をなくしていく」その思いを共有し事実と実践の交流、及び差別の問題の当事者性を問いながら議論を深めることを確認し、報告・討論に入った。

## II 報告及び質疑、討論の概要

### <1日目>

#### —報告1—⑥

#### 「将来につながる居場所づくりをめざして」

(徳島県人教)

#### ～主な質疑と意見・実践交流～

現在、あらゆる学校で不登校等の集団になじめない子どもへの対応が喫緊の課題となっている。八万中学校ではこうした生徒への支援として、校内教育支援センターである「学習室」を設置している。学習室の運営にあたっては学習室運営委員会を校内委員会として設置し管理職、生活指導部、担任、学年などを主な構成メンバーとして全教職員の共通理解のもと進められている。また、この学習室運営委員会が生徒本人の特性やニーズを理解するよう、様々な情報を集約してより適切な教育を進め

られるように取組が進められている。特に今年度からは学習室に専属の職員を配置し、より丁寧に当該の生徒に寄り添い、安心して登校できる居場所となるよう進めている。

本報告では、2年2学期より突如として欠席が続く、登校しなくなったAさんについての実践であった。当初、担任、学年主任を中心にAさんとの対応を進めたが欠席の原因を明らかにすることはできず、家庭でも学校でも無気力な行動が目立ち、日ごとに笑顔がなくなっていった。

実践が進むにつれ教員からのアプローチの他に、Aさんの友人Bさんの存在が大きく作用するようになる。BさんはAさんが心を許せる相手であり、学校からの配布物を届けるなど繋がりを続けていた。3年生になり家庭との連携は続けられていたが、このBさんは学校からの配布物を届けるだけでなく、Aさんの親しい友人として日常的にAさんと交友を続けていた。

3年生になりAさんから「学習室に行ってみる」との申し出があり、学習室へ登校が可能となる。ただ、試験を受けることだけは難しかった。不登校には多くの要因が複合的に作用していることが多い、進路選択という厳しさを受け入れることもAさんにとって大きな要因の一つであったのかもしれない。

ただ、言うまでもなく、欠席の多かった生徒が登校を再開するときには交友関係が大きく作用する。学級、学年などの集団へと繋がるまで、居場所となる学習室で過ごすこと。そこで基本的な信頼関係を育て直すこと、また、心許せる友人がいて学校へと繋げてくれたこと。担任、学年とていねいな関係作り。そういった様々な取組が働きあって不登校であったAさんの気持ちが少しずつ仲間へ向かいだす。そういった流れが報告の中でよく理解できた。

居場所とはなにか。学習室を確保すること、専属の職員を配置すること。それだけでは心閉ざした子どもたちの力になれるものではない。学習室が本当の意味で居場所となるにはやはり、そこに、子どもが安心していられる関係が不可欠である。また、不登校には実に様々な要因があり、これといった決定的な解決があるものではないのも事実である。状況によっては登校を促してはならないこともある。

討議の中で、不登校については生徒個人の課題だけではなく、学級や学年といった集団についても検討する必要があるのではないか。教室が子どもたちにとって安心して過ごせる場所となっているかなどが議論された。また、登校を再開することができた子どもについてはどんな働きかけがあったか。周りの子どもたちの働きかけについても重要であるなどについて意見が出された。

一人ひとりのこどもに丁寧に寄り添い、必要な教育を丁寧に追及すること。また、その子が抱えている課題を個人の状況に原因があるとせず、背景にある課題を明らかにすること。そして、ひとりひとりが安心して自分らしさを表現できる集団を作ること。これらは全て同和教育が追及してきたことではないだろうか。やはり、原点が重要であることが確認された。

#### —報告2—⑦

#### 「そのままの自分でいられる居場所をめざして」 (大阪市人教)

##### ～主な質疑と意見・実践交流～

家庭内暴力、虐待など子どもたちを取り巻く状況は日々、厳しさを増している。子どもにとって安心できる場所であった家庭が逆に子どもを傷つける、そんな状況が今では珍しくなくなってきている。カイトもまた、父から暴力を受けている子どもであった。2年生の7月に、遅刻してきたカイトに話を聞くと、酒に酔った父に殴られた。髪の毛をつかまれて床に倒された、などと父の暴力について話し、学校に助けを求めてきた。

多くの子どもが親からの暴力を他人に訴えることが難しい中、カイトは教員に暴力の実態を訴えてきたのだ。聞き取りを進めていくと母が学校で先生に相談するようになった。このことから家庭内暴力の事実が明らかになった。また、母に確認すると今までも父からカイトへの暴力があったこと、母にも暴力を振るったことも明らかになり、学校としてもケース会議を持ち、こども相談センター(児童相談所)とも連携して、対応を進めていくことになった。

当該学年では担任、学年主任を中心にカイトの気持ちを大切に、丁寧な対応を進めていく。経過を慎重に観察しながら、集団の中で見守りを続けていったのだ。当該学年では「応援される人、応援できる人になろう」目標に学年の集団作りを続けて

きたが、体育大会当日の朝、その場にカイトはいなかった。友達はカイトのことを気を使うが、遅刻してカイトがやってくる。実は父とトラブルがあり、父が出かけている間に体操服を取ってきたので遅刻したとのことだった。生徒たちはカイトに「待ってたよ、がんばろう。」と声をかける。周りの生徒とカイトとの間の繋がりを示すエピソードである。その後、カイトは3月に父の暴力から逃れ、警察に保護されて一時保護となる。さらに一時保護後、転校となった。

家庭内暴力の事例では、その後の連携は難しい。この場合、加害者である父を家族から切り離して他の家族を保護するためだ。これを契機に学校からカイトへの直積的働き掛けはできなくなった。しかしながら、7月に父の暴力が明らかになってから3月まで、短い期間であったが家庭を支え、見守った学校の役割は大きかった。家庭のしんどさを学校で話し、学校に助けを求めることができたカイトの行動は言うまでもないが、それまでの関係を構築できた担任、学年主任をはじめとする教師集団と学級の仲間たちの行動は素晴らしい。家庭での困難さを抱えながら、体育大会にはどんなことがあっても参加したい。そこには居場所としての学級があり、仲間がいたからだ。

私たちは同和教育に携わってきた先輩方から子どもの実態から学べと繰り返し教えられてきた。このことは教育一般に通じることである。確かに家庭内暴力や虐待等の課題については学校単独での対応は難しい。警察や児童相談所などの他機関との連携が不可欠である。では学校はそんなに無力なところなのだろうか。実は決してそうではない。教師はこどもの一番近くにいて直接見守ることができる。こどものサインを一番先に感じ取れる。大事なことはこの立ち位置をこどものために生かすことではなかろうか。地域のセーフティネットとしてこどものよりどころとしての学校の役割はますます重要である。そのままの自分でいられる居場所としてこどもがよりどころとして、豊かな包容力をもつ学校を作っていきたい。

#### —2本のレポートを受けての討論—

協力者より2本のレポートの討論概要を確認  
<1本目>

- ・家庭訪問・家庭背景を知ってどうするのか。
- ・居場所とは？場所と人員が確保されているからではなく、この「つらい気持ち」をわかってくれるから。
- ・Aさんは本音がだせているのか、語れているのか

(言えないのは何が作用しているのか)

## <2本目>

- ・虐待案件、命がかかっているが、その前にもっと何とかできなかったのか。
- ・関係機関との連携、教育と福祉の連携とは言うが、その中で、何が大事なのか。
- ・家庭状況・家族関係に学校としてどう関わっているのか、出会って何を学ぶのか、Aさんを通して自分はどうか。
- ・まわりの子はどうか、集団づくりと関わって「わかってもらえるからこそ、安心できるからこそ語れる、失敗できる」が大切だが、なぜわかってもらえない状況があるのか、安心できない状況が何でうみだされるのか。しんどいと言える、おかしいと言えることが大事だが、逆にしんどい、おかしいと言えないのは、何が作用しているのか。

熊本 祖母のことを思い出した。来客がいるととてもはりきるが2、3日寝込む(父母は共働き)。そんな時間が好きではなかった。「何でそんなはりきるの」と思っていた。亡くなった後に知った。嫁いできた義理の母、姉、気をはりつめていかなければいけない暮らしの中に(きちんとみせていかなないと…そうでなければ言われてしまう)もっと早く知っていれば、手伝ったかも。これって差別はどこにあるんだということ、「女性が家に入ってきます。嫁いできます。嫁が…」の時代に生きてきた祖母。そういう見方に祖母は苦しめられてきた。どんな差別と闘っているのか、明らかにする必要がある。素晴らしい実践だったが、差別は見ようとしないと見えない。

福岡 2本のレポートとも、保護者との関わりや関係をつくるのが大切だと感じた。一本目のレポートで質問したかったが、担任ではなく、専属の先生が保護者にその子の思いを伝えていたのか。小中一貫校で、中学生で別室登校の子と関わって、少しずつ関係をつくることで話してくれる。担任も引き継ぎを熱心に聞いてくれて関わっているが、いろんな大人がその子と関わるのが進路・学力保障にとって大切。自分の反省として、ともだちとその子をつなぐ、ということができていなかった。

鹿児島 高校につとめている。お利口さんにしているのに不登校、居場所ってどうなんだろう、そういうのを考えたくて来た。2本目のレポート、父親が気になった。それまでは問題のない父親だったのか。親となって虐待は中学校から、ということは何でだろう。わからなくなった…今、自分は進学校につとめているが、聞き分けはいいが、子どもたち同士の関係性は微妙なこともある。小中で問題を話し合う中に、子どもはこう育てなければいけない、ということで、うまくいってない部分があるのではなど、今日はたくさん感じる事ができた。小学校2年生の息子がいる。発達に課題(知的な遅れ、落ち着きがない)があり、保育園では友だちの保護者に謝ることがあった。小1では、ともだちに向かっ

ていくことはなくなった。特支の先生から「ムカムカしたら水道をガブガブ飲んでいる」と。気持ちを押し込めているのを褒めたい反面、息子の気持ちを思うとつらくなる。その結果、たくさん心にためこんでいるんじゃないか。

学校の中で子どもをどうみているのか、親の想いをどう受け止めているのか、を自分の学びにした。協力者 保護者との関わりが担任なのか、他の先生なのかという質問があった。

徳島 原則、担任が保護者とのやりとりをしている。

協力者 保護者との関わりで学校とズレていないか、どういうまなざしで子ども、現象を捉えて、どう伝えて、どう返していくといいのかということも議論したい。

宮崎 児童生徒加配。これまでたくさん子ども、保護者と関わってきた。この場で伝えたい。

小学校3年生の子、頬にアザがある、父親になぐられて筆筒にあたって、「お父さんは私のことを大切に思っている」、でも、その気持ちとかけ離れている。私はあなたが「お父さんのこと大好きだよ」と伝えたいと思った。「なんで叩かれるんだろう?」と思っていることを聞いてみたらと促した。お母さんに電話したら(その場にもいたので)、「学校はまた電話してきて、わたしたちのことを虐待してるって、虐待の親って言うんでしょ」「この時間パートをしていて給料すごくひかれる」って、すごく言われた。

「こどもさんのことやから、夕方過ぎてもいいから学校にきて話そう」⇄校長、危険だから…わたし、それでも話した方がいい。次の日、校長、養教、父と同じ世代の男性教員、わたしで、まるくなって話をした。母は「この場にいることが、わたしたちが虐待していると言った先生がいること自体が許せない」すごい剣幕で…ずっと聞いてることしかなかったが…「母(わたしは)2番目に結婚した。その時、この子がうまく話せない、社会に出た時に困らないように厳しくあたっている、勉強もずっとさせてるし。母親としてこの子を守っていかないといけない、立派にしないといけない、という思いできついことを言っていた」。母は家の中で、何とかこの子をうまく成長させてやりたい、という思いが、違う方向にいていた。なぐったのは、父は「(そんな思いでいる母から)逃げたから、それが許せなかったので殴った」親の思いはわかったし、2人が愛情を注いでいるのはわかったが、手立てが間違っている、子育てが間違っていることがわかったので、「わたしは、この子大好きですよ。お父さんのことも大好きですよ、と思っている。でも、この時、「だれか助けて!」とも…男性教員が、子育てがうまくいってないということも円座になって伝えていた。わたしはこの時に、「こうやってみんな子育てしていくんだな、新しい発見も、気付きも、『こどもの声を聴く』ことも…」を教えてもらったことがあって、それが一つ伝えたいこと(忘れてないこと)。

今、関わっている子の中に、週末明けにアザがある子がいる、「昨日、魚釣りがうまくできなくてお父さんに叩かれた」と他の子に言っている。それを聞いた子がお母さんに言って、通報となった。すると、その子がすごく荒れる、他の子に対してつらいこと、原因が「お父さんとの確執があった」がわかった。学校ができることは、話すことしかできない。母親は小さい子を抱きながら、この子を守ることもできない、その歯がゆさに泣くんです。その泣く場所を学校はつくっていきたい、どうやったら提供できるか、ということを決めているところです。一人ひとり、どんな人生を歩んできたのかなあと、わたし自身のことも話すところはほしいし、いろんな人の人生を聴いてみるのもわたしたちの役割のかなあと、一人の人として出会っていけたらな、と。

**奈良** 自分が小学校の時、母に「あんたって悩みなさそうやな」と言われ、「親はきずいてくれるんじゃないの」と、親が信じられないな、と生きてきた。子どもの選択肢になることが大事と思っている。1本目のレポートで、中学校では、高校では、学習室があるかないかではなくて、職員としてどうだったか、を考えないといけない、子どものしんどさや思いをうけとめる研修を自分に返すことが大事。

2本目のレポートでは、信じられへん人には何もしゃべらない、こどもにとって、自分はどうだったか、どんな存在だったかを見つめないといけない。教師、人としての願いを自分の経験をもとにして話す。自分のことを話せるクラスにしたい、自分のことを語れる関係になりたいから、子どもに自分のおいたちを語る。子どもの進路・学力保障をするために、何ができるか、子どもとどう向き合っていくか、は重々分かっている。子どもの背景を知る中で、自分はどう在るかを常に考えていくことが大事であることがわかった。

**京都** 児童自立支援施設内の中学校につとめている。京都以外にも他府県からも、虐待、性被害等生徒が、寮生活をしている。この子らが出ていった時にがんばれるようにと一生懸命がんばっているが、今日、レポートや皆さんの話を聴かせていただいて、わたしたちももっとがんばらなあかなと思いました。ありがとうございました。

<2日目>

—報告3—⑧

「3年間でAが手にしたもの」

(京都府人教)

～主な質疑と意見～

**滋賀** この報告の中に出てくるケース会議。私が勤務する学校でもこのようにケース会議を開きながら、支援をしている。ケース会議の前に、たとえば教育相談委員会などがあったのか。そしてあとひとつ、Aさんが卒業した小学校との連携はどうであるのか。

**報告者** 一つ目の質問について、ケース会議を行う前に、校内で支援委員会を開き、そしてケース会議につながっていった。二つ目の質問については、本校は、小中一体型の義務教育学校であり、職員室も、私が在籍する中学校の職員室のすぐ隣に小学校の職員室があり、頻繁に情報交換や相談ができている。

**福岡** 二つの質問がある。一つ目は、Aさんが欠席が続いていた時期に取り組みされていたオンライン授業について、このオンライン授業は、Aさんが登校する別室登校の時に、学校で行っているのか。あるいは自宅でもオンライン授業を行っているのか。二つ目は、Aさんが別室登校となっていた時期、クラスでAさんのことをどのように伝えていたのか。

**報告者** 一つ目については、Aさんの別室登校の時に、学校で取り組んでいた。学校を休んでいる時に自宅でも、ということはやっていない。学校に登校(別室登校)して、別室と教室を繋いで、というものだった。二つ目は、小学校から互いのことを知りあっているなかまであり、私も「Aさんとこないだこんなことがあったよ。」「Aさんはこんなこと言ってたよ。」みたいなことを教えてくれて、私もクラスの子ども達に助けてもらった。クラスの子ども達にはAさんの様子を伝えていたし、逆にクラスの子どもの様子もAさんに伝えていた。

**大阪** この報告の中にある「語る会」について。国語の授業の中で、作文を書くことになり、Aさんは自分が学校に来れなくなったことを書いている。Aさんはなぜ、このことを、自分のことを書こうと思ったのか。

**報告者** この「語る会」は、国語の授業での取り組みである。国語の授業担当の先生に聞くと、Aさんはかなり悩んで、悩んで、そして最後は「よし、自分のことを書こう」と決めた様子であった。学年の目標に「思いを伝えあう集団になろう！」という目標があり、私自身も自分が中学校時代に思い悩んでいたことなどをAさんやクラスの生徒の前で語ったことがある。

**奈良県** Aさんの「語る会」での姿を聞き、その姿を思い浮かべながら、私が出会った子どものことを思い出した。私が以前、担任していたコウヘイ君という男の子。卒業式の歌の練習で、コウヘイ君はピアノを弾きながら、とても大きな声で歌を歌っていた。そのクラスの子ども達は小学校6年間、そして中学校3年間を同じクラスで過ごしていたのだが、大きな声で歌うコウヘイ君とは幼いころから長い付き合いがある。周りの子ども達は、コウヘイ君を笑っていた。その姿を見て、私はとても苦しくなった。笑っていた子ども達に話を聞くと、「コウヘイはこういう子だ」という決めつけがあり、コウヘイ君の知らない一面を目の当たりにし、「この子には、こういう一面もあるんだ」と違う一面も含めて、その人のことをちゃんと知っていく、そのことが大切だとその時、思い知った。そういった面から、このAさんが自分のことを作文に書き、そしてクラスで語

った「語る会」は、その人のことをちゃんと知っていく。そのことにおいて学ぶことができる最たるものである。そして、人が語るためには、「聞いてくれる人」の存在が大切であると思う。大人(教師)が自分のこと、しんどかったこと、これまで話してなかったけど、本当は伝えたいこと、そんなことを語り、そして子ども達も自分のことを語っていく。そしてお互いのことをちゃんと知っていくこと。この報告から、Aさんの立ち上がりから、学ばせていただいた。

**福岡** 一人ひとりに丁寧に関わっておられる報告で、今大規模校に勤務する私としては、大切なことを学ばせていただいている。報告の中で、教室に戻ることや高校進学における進路選択においても、Aさんは自分で決定していている。このことはとても大切なことだと思う。そのAさんの姿から、私自身を問うことができた。私自身の価値観を子ども達に押し付けてはいないか、省みることができた。「テストではいい点数を取った方がいい」「学校は休まない方がいい」そんな私の価値観を子ども達に押し付け、私の中にある「枠」をはみ出そうとする子どもを、その枠の中に押しこもうとしている自分がないか、省みることができた。子ども達が学校生活を送る中で、何かしらの不安を覚えた時、その不安はいったい誰がつくっているのだろうか、考えることができた。わからない時に『先生、分かりません』と言えない状況があるとしたら、その言えない環境は、教師である私自身が作ってしまっていないか。また、子どもにとって、学校という場所が、不安な場所に感じてしまい、学校への行きにくさ、あるいは生きにくさ、というものをつくってしまっているのであれば、それは私たち教師が作ってしまっていないか、省みることができた。

**鳥取** 報告者自身の自己開示が素晴らしいことであり、やはり大切なことであると確認することができた。そのことが、Aさんの語る会で自分を語っていくことにも繋がっていると思う。教師である私自身の失敗した経験や情けない自分のことも含め、私もクラスで子ども達に語ってきた。やはり大人(教師)も自分のことを語ることで、そのことをもう一度大切に、また明日からの実践につなげていきたい。

**滋賀** 報告者はAさんのお父さんやお母さんともよく繋がっておられ、報告やAさんの変容から学ばせていただいた。人と繋がること、やはりこのことが差別をなくしていく一歩となる。そのことを再認識することができた。

#### —報告4—⑤

「僕と一緒に差別をなくすための行動ができる人になってもらいたいです」

(福岡県同教)

～主な質疑と意見～

**滋賀** 6年生では部落史学習、リーダー研、人権学

習をするとあるが、保幼小中高ができていることが大事。湖南省でもやっているが、小学校と中学校が連携する上で、授業を見合っているのか。

**報告者** 以前は公開学習をしていたが、現在ではできていない。小中連携ができていないのは課題だが、話し合いはしている。

**大阪** ①解放子ども会ということで部落にルーツがあるAかと思うが、A自身が部落に関して学習したり発表したりすることに対して、「いたみとかつらさ」があるのか。自分のルーツに関してどう捉えているのか。②仲間について、Bとは一緒にがんばれるとあるが、なぜ、がんばれるのか。Bの立場性は。③人権フェスタでは、Aは「一緒に差別をなくす仲間になってほしい」と発表したが、まわりから反応があったのか。

**報告者** ①解放こども会の中でお家の方が相談員として参加されているので「ここがそうなんよ」と話されているが、まだピンときていないようなところがある。教材としての部落問題ではなくて、自分事としてなくしていく、わたしたちの問題として捉えだしてきたな、という感覚がある。まだ、いたみとかは感じていないのではないかと考えている。②Bは部落の出身ではない。2年生と4年生と6年生で3回もっているが、4年生でAとBは同じクラスだったが、あまり仲が良いという様子はなかった。3年生でBは、クラスに入れない時があり、保健室登校。教室に入りたいけど入れないつらさや、自分を見つめる時期があった。4年生の時は、友達と関わっていく中で、だんだん自分から話しかける姿や積極的になれる姿があった。Aにも時々行き渋りの姿があり、自分と重ね合わせているのでは。また、お互いが通じ合うようなところがあったのでは。Aが車から降りられない時も、Bが「ぼく行ってきていい」と言って、Aと一緒に登校する姿があった。6年生ではお互いを信頼しきって助け合えるようになった。③人権フェスタでは、クラスのこどもは参加していない。お家の方は「発表がよかった」と、あまりにも堂々としている姿に「成長を感じた」と、家庭でしっかり話しをしてくれていた。

**協力者** 質問の中で、「いたみとか」の言葉があったが、報告者も「いたみはまだ」と返されていたがひっかかる。ムラのことではいたみを受けるとか、それがおかしなことで、差別する側の問題であって、ぼくたちの問題であって、何気なく使われていた「いたみ」というものが、もしかしたらぼくたちの内側にある差別性とか、思っていなくても差別する側に立ってしまっているとか、そういう現れではないかとひっかかっている。差別する側の問題なので、ちょっと整理をしたいなと思った。

**大阪** つけたしをさせて頂くと、昨年関わっていた小学校6年生のAが部落にルーツにある子だったが、自分のルーツを明かすことをすごく苦しんでいた。わたしも差別をする側に問題があると考えている。ただA自身が苦しんでる姿をみていたので「いたみ」という言葉で表現した。それが適切だった

たかどうか分からないが…。

**福岡** 全同教に10回以上、今年が最後かなと。今の司会者が言われたこだわりが腑に落ちないところがある。大阪の方が質問されたことはよく分かる。差別自体は差別する側の問題だが、差別によって傷つくのは悔しい思いをするのは被差別の立場の者なので、その人(子)たちがどのように立場を自覚していくのかということは、同和教育を進めていく中でとても重要なこと、大事なこと。差別する方が悪いから、被差別の側がいたみをうけるのは間違ってるじゃなくて…被差別の側がどう受けとめていくのかということ、「丁寧に」(進めていく必要がある。)あとは、意見交流で言いたいと思う。

**協力者** 説明が足らず申し訳ない。ムラの子、ムラの人、自分のふるさと、自分のことで「いたみを受けるんだ」という刷り込みや決めつけの意識が質問者の中にあるのであれば、「そうじゃないです」と、問いかけも含めて発言した。

**京都** A自身が親の思いをもって、自分自身の思いを表現するという課題を解放していく、人の前に立って話しができるようになっていくという成長を感じさせてもらった。①レポートに相談員のDさんが「親としての思いをAにも伝える」とある。父親が、体験したことというところが、「いたみ」の部分が含まれていたのでは…ここで語れる範囲でよいので、どのようなDさんの経験がAさんに伝えられたのか、を教えてもらいたい。②Aさんは、今、中学生になっているが、「リーダー研、来年は参加せん」と言っていたが、そこからどうなったのかを教えてください。

**報告者** 実は今、お父さんがきているので、お父さんから話しをしてもらう。

**福岡(Aの父)** ①生涯学習課で社会教育相談員をしている。学校教育、小中などのいろいろな相談業務、フェスタ、リーダー研を担当している。また、地域の支部で解放子ども会を立ち上げたので運動と一緒にやっている。体験というのは、自分が友だちから受けた差別発言や、昔から地域のことを「悪さが多い」「あそこのお家の子と遊んだらダメ」と言われてきた。そんな中でずっと育ってきたので、いろんな差別的な話を聞いたり、就職の時に差別発言を受けて就職がダメになったり、そんな話を子ども達にしている。家の中でもご飯を食べながらいろんな話をする中で、狭山の話の中で、福岡に石川さんが来た時に、私もこども会の子を連れてみんなで参加したことなどを話しながら、自分が経験したことを伝えている。自分の地域は昔からそんなことを言われてきたが、そんなことに負けずに「堂々といてほしい」と伝えている。

田川市には福岡の五大祭りがあり、鎮西小校区の中で唯一、山笠を出しているのが自分達の地域なので、そこでいろんなまわりからの差別発言、差別意識がある中でも、友達とヤマを出して、そこで「誇りをもって生きて欲しい」と伝えている。

**福岡(中学校担当)** ②Aのその後の様子は、正直、小学校の時と変わっていない。中学校の合同研でも兄とともに二人して「イヤ」と言っていた。そんな中で、兄は、冬の教科学習で担任が声をかけることで、クラスの3人と一緒に参加できた。「しっかり学習できた」との実感があり、合同研にも「夏も冬も参加する」と兄は即答したが、Aはなかなか「うん」とは言わない。でも、今年の夏の合同研には兄と一緒に参加できた。1年生では部落問題の基礎講座、2年生では部落差別の現実(差別はがき、インターネットによる差別事象など)、3年生では解放運動の成果(解放奨学金、統一応募用紙など)の学習を進める。でも、学年毎では難しいところがあったので、昨年度は、映画「破戒」をみて学習を進めた。今年度は1、2年を合同にしてAが参加しやすいように工夫して取り組んだ。「部落のこころを伝えたい」の吉岡さんの話で、部落差別と出会うまでは差別から逃げていた。でも、やっぱり部落のことを学習しなくては…でも部落差別ってなくしていけるのか…と不安・葛藤の中で、高校生が「部落差別をするのは、部落外の人。その人達がかんばらないといけない。」という言葉に展望をもてた。部落の子どもたちも部落のことを学ぶ。だけど、根本は、そのまわりにいる差別をする部落外の人達がかんばらないといけない、という思いを、事前研修に参加する教員に伝えている。再来週の人権フェスタでは、夏の合同研の報告をしようと考えている。冬の合同研では兄もAも参加すると言っている。

**協力者** 質疑応答と実践交流がまじり、時間も経過してしまった。休憩をはさんだ後、次の総括討論の中で、2本のレポートを受けての討議も含めて、課題を整理しながらさらに議論を進めていくことでよろしいか。さらに、協力者団で先程の「いたみ」の見解も示すということ、会場全体で確認・了承を得て、2本目のレポート報告及び討議を終了した。

### Ⅲ 総括討論(2日目の2本のレポートを受けての討議も兼ねて)

～協力者団より(「いたみ」質問についての見解)～

「いたみ」という言葉の質問についてひっかかったのが、受け答えも含めてどうかと思ったので、発言した。その後のやりとりでみてきたものがあった。部落に対するマイナスイメージの刷りこみや決めつけがなかったのかという懸念から発言したが、差別する側の問題だということが明確になったことは嬉しかったこと。しかし、福岡の方からもご指摘いただいたが、自分がよく分かっていない状況で発言して申し訳なかった。僕が、自分の中に刷り込みや決めつけがあるからこそその発言だった。自分を見つめながら、総括の中でさらに議論を深めていきたい。

**協力者** (司会・進行も兼ねている)僕が、発言を確認し、提起しなければいけなかった。おかしいので

はと思ったから、その時に発言され、丁寧に議論がされたことを協力者団も確認した。

そもそも部落とは本来は集落の意味。ぼくの親父は、東北の方の出身で、福島生まれ茨城育ち、炭鉱に関わりがある。その親父は、差別意識なく本来の集落の意味で部落と言う。親父は、小学校低学年で両親をなくし、身寄りもない中、幼い妹を連れて過酷な環境を生き抜いてきた。その親父を尊敬している。母方のルーツも大牟田の炭鉱、さらに言えば台風被害、飢餓状況の与論島から移住したが、低賃金重労働の中で差別も受けた。それでも誠実さ「誠」を大事にして生き抜いてきた。大牟田の方はそのことを教材にして、ぼく自身が出会い直しをさせてもらった。その中で、つらさや苦しみはなかったのか、と言えばやはりあった。たった一言がささる…現在もたくさん差別がある。見ようとしなければ差別は見えない。差別をなくすための大会、ということを再確認して討議をお願いしたい。

**福岡** 教育行政の立場から議論に参加させてもらう。進路・学力保障を考えた時、自己実現、社会参画に向けて、果たせる役割は、場の設定や条件整備、予算確保等である。地区学習、リーダー研、人権フェスタ等の事業を通して、子どもたちが意義や価値を再認識して、学びの土壌をつくっていくということを大切にしたいと思っている。合同研は人材育成と横のつながり、それを発信する場を一体的に市・行政の責任として連携して取り組みを進めている。自分自身は、条件整備だけの行政の役目が終わらなアカンと言われるが、さらさらそうは思っていない。僕らが、自分が主体的に参加して、つながっていく、つなげていくという視点をもっていきたいと思っている。最近で言えば識字の話を、地元のムラのおばちゃんと私で対談形式で子どもたちに伝えていった。地域の学びが、子どもだけでなく大人も人権について学んでいる。その中で、人間としての尊厳を取り戻すといった取り組みを、こんな価値や意味があるんだということを伝え、将来展望を果たしていきたいと考えている。来年度の予算、田川市は旧産炭地域でお金がない、来年度の予算も削減と言われるが、行政の責任として、子どもたちの進路を保障するための必要不可欠な取り組みだということ、きちんと要求していき、継続していきたい。

**福岡** 進路・学力保障の分科会だが、学力保障という言葉は、この10数年、文科省のテスト等違う意味に使われている。テストで100点とらせる力ではなくて、学びに向かう力を保障することが学力保障だと考えている。教員5年目の時、担任したムラの子の姉がいた。その姉は小学校の時、とても成績もよく積極的だったが、中学生になって落差別のことを聞いて出身のことを知らされた。そのことで自分の将来に対してもっていた夢をこわされて、やる気も失って、成績はどんどん下降して行って、実家にもいないということがあった。被差別部落出身であるということ子どもたちが知るという

ことは、「あんた出身なんよ」などという乱暴な伝え方では、へたをすると命に関わる。より丁寧にしないといけない。その丁寧な実践が全同教で交流されてきた。

15年前に体験したことだが、地域の解放子ども会で支部長が話をする。支部長が「なぜこの集会所の名前が、こんな名前なのかわかるか」ということを伝える。地域に対するまわりの差別意識があることを話した。聞いたこどもたちは、自分たちのこの地域を差別する人達がいるということを知って、6年生の子は、ふりかえりに「こわいと思った」「自分たちの地域を差別する人たちがいるということがこわい」と書いていた。私はその子の家について、おばあちゃんに伝えたら、「わかった。先生ありがとう」「こうやって書かせてくれたから部落差別のことをこわいと思っているということがわかったから、私が話をする」となった。6年生の子の父親(おばあちゃんの息子)がムラの出身、母は部落外。おばあさんは6年生の孫に「あんたのお父さんとお母さんが結婚する前、「うちは部落ですよ。そのことで、後でごちゃごちゃ言うんなら、この結婚はなしにしてください」と言った。すると、お母さんのご両親は、「そんなことは、娘とお宅の息子さんが結婚するのに、何も関係ないです。よろしく願います」となったから、あんたのお父さんとお母さんは結婚して、あんたが産まれたんよ」と伝えてくれた。すると、その6年生の子は、最初は、差別する人がいてこわいと思ったけど、それ以上へこむことなく元気に育っていったということがあった。

私は、被差別の立場の子が自覚していくというのは、差別に負けずに一人の人間としてしっかり生きていくモデル像が必要で、差別の仕組みを正しく理解する力、正しい知識が必要だと考えている。別の件で、田川市の中学生の学習会で、それまで部落差別や人権が語られていない家庭の子が参加して、そこで初めて自分が差別される立場なんだと知った子は、その学習会で泣いた。自覚するまでに何がその子にはいっているのかが大事で、地域の活動の中では、その地域の人が何を大事にしてきたか、ということをしっかり学習した上で自覚していくことが大切だと感じている。

鎮西小の取り組みの中では、家庭の中で普段から話をしていく。意図的にそのような話し合いの場をつくるのが大切で、何かあるごとに先生が家にいって話をする、お父さんは先生たちに向かって話をする、そのことをこどもたちが知っている。そういう空気を吸いながらAさんもお兄さんも育っていく、お父さんの想いは伝えていく。そういうお手伝いが教員には必要と思っている。

**熊本** 市では小学校中学校通して人権学習をしている。保護者の方とムラの子、ムラ外の子も親子学習をしていく。でも、「いやだ、したくない」となる時があり、「ぼくも一緒にはいるから、3人で親子学習しよう」と話していく。親子学習の冒頭、お父さんは「ごめん」と謝りながら話し始めた。「こんな話をま

だせなあかん」と。その子はとても真剣に話を聞いていた。ムラの50代のおじさんは、同和教育が始まった当時、「こんな苦しい差別がある、こんな厳しい差別がある」という現実を伝えられた結果、「こんな差別があるというワクチンをうたれているように感じた」と言っていた。でも、本当は、そうじゃなくて、「そういう現実があるなら、どうにかしたいけど、自分はどうしたらいいか分からん。だれが差別の現状を一緒にかえてくれるのかな、だれが自分の仲間になってくれるのかな、というのを知りたかった。それが分かるためには自分自身のことを語ってもらうしかない」と言われていた。

あらためて進路保障における仲間って何だろう？と考える。学校という場から卒業していく。今まで物理的に近くにいた子を仲間と思っていたけど、はなれていなくなっていく。差別事象や事件に出会った時に、それを言い返す時に、仲間をさがしている暇はない、その場で言うしかない、一人でも言っていけないと…でも、その強さは仲間がいるって自分の中に信じられるものがあるから言える。

学習会で高校生の子が、中学校の時の人権集会の中で訴えたが、それに対して返してくれた子があまりいなかったと言った。あとで聞いたら「こわかったです、何を考えているのか…でも、やっぱりやり続けていくんだと決めたんです」と言った。「あなたにとって仲間とは？」と聞いたら、「わたしが立ち上がったら、きっとあの子ども立ちあがってくれる、と信じられることです」と、その子は言った。田川のレポートのタイトル「ぼくと一緒に差別をなくすための行動ができる人になってもらいたいです」ということを、ぼくらは強く受け止めなければならない。ぼくらの目の前にいない所でも、がんばっているんだと、お互い思えるようなつながりをつくらなければいけないと強く思った2日間だった。

福岡 子どもの話をする。鎮西小で特別支援学級を担当している。担任しているAさんは「勉強すかん、勉強せん、お前がすかん、じいさんがすかん」と言う。ぼくは担任として勉強させんと思うけど、うまくいかない、勉強しない。関係づくりしかない、と思っていっぱいしゃべった。すると、Aさんは、「大好きなお父さんといられんようになった、あいつのせいで」と母の悪口ばかり言う。母ともそういうことを話した。ふと気付いた。話をしているうちに、子どもと対等で話してる。その子がうらやましいなど感じている自分がいた。思ったことを何でも本音で話している。自分は親に対してそこまで反抗的に言ったことはない。この子はいろいろ聞いてくれるから、何でも語り合える仲間みたいな気持ちになった。「先生ね、子どもの時、ものすごい悪かった。5年生の時、あいつとは野球せん、と一人ぼっちになったんよね。さびしかったけど、しょうがないよね、弱い者いじめてたりしてたしどうしようもない人間だった」。

朝会うと、遠くから「おーい！〇〇」とよびすてにされた。自分はそれがはずかしいと思った。教師とし

てこどもにそんな風によびすてにされることが、教師としてダメやと。他の子ども聞かれて伝わっていく…これまでの議論であった遅れてきても注意されない子、まわりの子にそう思われるのがいややったと同じように。子どもは教師をそういう風に捉えとった。教師は子どもをそんなように見ていた。

もう一人の子が「先生、悪霊みたことあるか、俺、悪い夢をみる」と言ってきた。「先生もあるで、追いかけて逃げてという夢」と言ったら、「先生ね、夢は実際体験したことが出てくるんや。こどもの時、悪かったやろ、だからそんな夢みるんや」「どうしようもない人間やったし、今、教員してるけど、こどもを叩いたこともある、我が子も叩いたこともある」と言うと、さらにもう一人の子が「先生、大人ってみんなそうやない？親ってみんなそうやない？」って言ってきて、ドキッとした。大人に対するこどもの認識。こどもって先生の前で弱い。差別はどこにあるんかって、差別どこにあるやん、自分がこどもをそうやってみよるわ。大人はこどものことをそんな風にしか思っとらんわ。だからこども基本法ができた。差別があるから、こっちに立っているから見えないだけで、こどもはいつも感じてる。

絵を描いてやろう、指導せんいかんと思ったけど、何か違うかなって。一緒に歩んでると楽しい、人権に関わる話をする、一生懸命、自分のことを言うてくれる。前の日は、勉強させようとしていたが、やめて、そういう話をした後、前と同じプリントをだしたけど、すぐにやってしまった。「何や、できるやんか！」と。無理矢理させようとしてもしない、それに気付けない。一緒に歩むことで、こどもは「(先生は)差別を一緒になくしていける仲間やぞ」って、こどもに差別をなくすこどもとして育てるではなくて、一緒に歩めれば差別をなくす仲間になれるんだと、それが一番楽しい。この歳になってやっとAに気付かせてもらってこどもに感謝。

協力者 一緒に歩む、そのことが楽しい、それが差別をなくすことになる、ということを伝えたい。Aさんのことをどうみてるのか、特別支援、不登校支援、いじめ、虐待のケース等で関係機関と連携するとあるが、そもそも「わたしがこの子どもとどう向き合っているのか」ということが、とても重要である。保護者の方が地域の方がどういう想いを願っているのか。それは、何度も家庭訪問をしたり丁寧に対話を重ねることを経てうまれてくる。Aさんが返してくれるその一瞬がとても尊いということ。今、私自身が学ばせていただいている。差別に負けへんために、なくすために、これまでもずっと闘ってきたんだという自負。だからそこに誇りをもつんや、そのために伝えるんやと。「一緒に差別をなくす仲間になってください」というAさんの想いが、お父さんの願いとともに伝わってきた。小6の息子がいるが、1学期にあった修学旅行にいけなかった。その学期はほぼ全欠になった。それでもどうしていくか。Aさんのお父さんの気持ち、お母さんの気持ち、地域の方の願い、学校の先生方が

その後どう関わってくれていたかを聴いて、とてもあたたかい気持ちになった。

**滋賀** 発達支持的生徒指導、挨拶、声掛け、励まし、賞讃など、いかに支えていくか。どのレポートも家庭訪問に行き、親としゃべり、励まそうとしている。熱く語っている。あまり難しく考えず、当たり前のことをやればいい。家庭訪問、一番大事なものは、声を掛け、Aにたくさん問いかけ表現させること。できたことを認めるとか、SSRでも、「ようきたな」と対話し、親としゃべりながらやっていくことが、大事なことである。

**奈良** 進路・学力保障は、仲間づくりや人とのつながり方を知ることと思っている。その視点はどこから出てくるかということ、根本は目の前にいる子どもが好きだということにつながっていて、同時に自分が子どもをどう見てるか、という視点につながっている。取り組みの確かさは、子どもたちが必ず教えてくれる。子どもが検証軸。検証し続けるということは、自分がどの立場で子どもと向き合っているのかをまのあたりにすること。わたしがどうであるか、子どもの選択肢になることが大事。報告者のみなさんは、困った時のつながる相手、選択肢になっている、モデルになっている。人権教育の視点をもって子どもと関わっていくというのはどういうことか、自分が身にまわっているいろんな鎧をぬいでいく作業。子どもをみるめ、自分がまわりからどう思われているだろう…鎧をぬいでいく作業は一人ではできない、だから、仲間とのつながりをもとにして鎧をぬいでいく。それは昔から解放教育でいわれてきた「誰が解放されるか…自分自身だ」ということ。そういう視点で子どもと向き合っ、子どもに助けられてこれまでやってきたのかと思っている。そのために、ぼくが、何かある時の子どもの選択肢でありたいと思うし、これから出会っていく子が何かあった時に、ぼくの顔が浮かんでくる関わりをしていくことが僕にとっての進路保障だと思っている。

生活綴方等で子どもに語ることの実践をしてきたが、父がうつになったことを打つ明けてくれた子がいて、「それを生活綴方に書いてみないか(発表会もある)」と言ったが「いやや」とふられた。1年越しに「やるわと」となったが、母は「家でしんどそうでした」と、僕は語らせることをゴールにしていた。しかし、本人にとってはそうではなかったと反省した。でも、卒業時に母から手紙をもらって「あの時に語らせてくれてありがとう、そこで語らなかつたらお父ちゃんがうつになったと、ずっとこの子は語れへんまま生きてた。あそこで語らしてくれる環境があって聞いてくれる人がいるということが、この子の人生の中で救われたんだと思う」と書いてくれた。その時に選択肢になり続ける、なれるかどうか分からないが、自分の立ち位置を常に問い続けていくということが、これからも自分にできる取り組み、場所が変わっても目の前にいる子が変わってもできる普遍的なことなのではないかと、4本の

レポート通じて確信がもてる時間となった。

#### —報告者から一言—

**徳島** 部落差別を受けてきた人に同和問題をどう伝えたらと思っていたが、しゃべる覚悟があると言われたが、その覚悟が分からなかった…この2日間で少し分かった。

**大阪** 進路保障は一步を踏み出す勇氣と思った。聴き合うこと、仲間の大切さ、自分をさらけ出すことが原動力。カイトはおもしろくてかっこいいことをめざしている子。その一面もお伝えして、応援いただけたらと思う。

**京都** 初めての報告で緊張していたが、この2日間会場の雰囲気はすごくあたたかかくて救われた。みなさんが聴いてくれるから自分も話せたい、他の方も意見を言うので、自分が聴ける位置にいたいと思った。明日からもがんばろうと思った。

**福岡** 差別や人権の問題を自分事として捉えることの大切さを強く感じた2日間だった。つながることをとても大切にしてきたが、今日もつながりでたくさんの方と出会い、支えていただいで自分の学びが深まった。実践につなげたい。

**福岡** 「まだ」という発言をしたが、自分自身に無意識に刷りこまれたものがあると思う。研修内容を考えていた時に、「部落の者は部落のこと差別しない。部落差別するのは部落外の人」と聞いて、当たり前だけどそうよねと思った。私が部落のことをどう思ってたんだろうと自分自身と向き合うことができた。「差別は日常生活の中で息を吸うように入ってくる」と聞いて、生活の中に、自分の中にあるものと向き合っていないといけない、学び続けないといけないと思った。自分もたくさん人と出会っていかねばいけない。働き方改革で朝の連絡もメール、家庭訪問をなくす動きがあるが…でも、子どもの背景をつかむためには、やはり日頃の家庭訪問が大切。すごく緊張していたが田川市同教の仲間が支えてくれて、安心してここに立つことができた。その安心した気持ちを体験しているので、それを子どもが体験できるようにしていきたい。